

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】阿部 尚史

【所属】（助成決定時）東京大学大学院人文社会系研究科

【研究題目】18-20 世紀イラン東北地方名家の経済活動と相続—イスラーム相続法と家門継承

【研究の目的】

中東イスラーム研究分野において、「家族史研究」が低調であることは既に 1990 年代末から指摘され続けてきた。しかし、現在でもこの研究状況は大きく改善を見ていない。助成者が専門とするイラン史研究の分野については、日本、欧米、イラン現地を問わず、従来、名家・有力者に関する伝記的研究は比較的数量多く行われてきた。しかし、既往の研究では、こうした名家・有力者の親族・家族関係や財産保有の在り方など、血縁集団の内部構造を積極的に明らかにしようという「家族史的研究」の試みは、ほとんどなされてこなかった。こうした研究上の空白の背景には、研究者の問題関心に加えて、史料的制約という側面が大きかった。しかし、文書史料の利用をはじめとするイランにおける史料状況の改善は、2000 年以降公刊されたイランの社会経済史に関する諸研究からも明らかである。こうした点を踏まえて、助成者はイラン西北地方の中心都市タブリーズ市に、18 世紀後半以来影響力を保持し続けたナジャフコリー・ハーン・ドンボリーの一族を、主にイスラーム法契約文書を用いて研究を行った。

【研究の内容・方法】

本研究では、助成の資金をもとに、2008 年 10 月から 11 月にかけてイランを訪問し、イラン国立公文書館のテヘラン本部とタブリーズ支部で調査を行い、上記ナジャフコリー・ハーン一族に関連する資料を収集した。助成者は以前の調査で、タブリーズにアミールキャビーリヤーン文書コレクションを発見しており、今回、さらに本格的に蒐集・調査を行うことが出来た。この調査で収集した資料は、イスラーム法廷文書と呼ばれる主として民事にかかわる文書と、行政文書、さらに家族間の私信が中心である。

そして調査で蒐集した資料をもとに、まず 18 世紀半ばから 19 世紀半ばまでの約一世紀を対象に、上記ナジャフコリー一族の経済活動を、収集資料のうち特にイスラーム法廷文書（特に売買文書）を中心に検討をした。具体的には、購入した物件のデータを集積して、その物件が都市部か農村部か、区分し、購入した農村物件（具体的には農村、農地、水利権）が、地図上でどこにあたるのか、現在の地図をもとに場所と名称を確定した。その上で、財産集積過程と財産の性格を明らかにした。この際注目したのが、村の購入、水利権の購入、庭園の購入など、市外の物件の購入と、商業店舗、隊商宿など市内物件の組み合わせである。

財産の性格、集積過程、規模をある程度明らかにした上で、蓄積された財産が、世代を経るごとにどのような変化を被ったのか、検証をした。イランにおいては「名家の継続性」という学説が存在したが、財産の細分化を前提とするイスラーム相続法が実社会にどのように適応されていたか、という点を考慮していなかったという重大な欠陥を孕んでいた。本研究では、イスラーム相続法と名家の継続性の関係性を検証したことに特徴がある。

【結論・考察】

18 世紀後半のタブリーズ市の知事であったナジャフコリーの財産は、地方支配者的な面と土地経営者的な面の二つを有した。19 世紀前半にカージャール朝下、代官として支配に協力したファトフアリーの財産は、相続財産と後得財産の双方から構成され、地方支配者的側面を喪失し、土地所有者・経営者的側面のみを有した。政治的・社会的影響力と財産集積との一定の関係があったためである。彼の財産の地理的分布は、一見すると祖父ナジャフコリーのそれと類似するが、内実は、財産の大半を後得財産が占める地域もあり、財産の継続性は限定的である。財産は、相続を基盤にしつつも新たな集積の重要性も高く、世代ごと再編成され変化したと考えられるのである。つまり財産と一体になった「家」は（あるとしても）一代限りであり、世代ごとに変化することが明らかになった。